

イマスという少女が見せた底力

ショリハツン・キプティヤ（インドネシア）

その少女の名前はシティ・マスロ。皆からは短くイマスやウロと呼ばれています。ここではイマスと呼ぶことにします。イマスは 19 歳で、中部ジャワ州のブレベス県にあるケタンゲンガンという小さな村の出身です。彼女は中学校を卒業後、首都ジャカルタに移り住んで5年程になります。

イマスはジャカルタに来た当初、北ジャカルタの裕福な家庭でメイドとして働いていました。その生活が1年程続いた後、彼女は私の家の近くのワルン（インドネシア語で「質素な食堂」の意）・キファナという小さなお店に移ってきました。彼女が働くその食堂で食事をするうちに、私は彼女と親しくなり、彼女の生活や家族について知るようになったのです。イマスは4姉妹の長女で、母親は自転車でお菓子の移動販売をしています。父親は廃品回収のような仕事をしています。イマスが中学2年生の時、父親が銀行から借り入れをし、それをなかなか返済できない状況になりました。そのため、イマスは学用品代などを稼ぐために、学校に通いながら働き始めました。農業労働者として働いたり、学校の休み時間にお菓子を売ったりしてお金を稼いだのです。彼女は高校に通うこともできませんでした。

ワルン・キファナで働き始めてから、イマスは接客の仕事の合間にリラックスする時間を持てるようになりました。お客さんとおしゃべりを楽しんだり、お客さん同士の会話を聞いたりして、いろいろな知識も深まっていきました。そんなある日、イマスは一人の客から、働きながら高校卒業資格が取得できるプログラムで学ぶことを勧められました。そこで、イマスは仕事のスケジュールを調整しながら学校に通いました。現在は、高校の課程を修了したことを示す卒業証書を取得しています。

イマスは、自分の夢は親よりも良い暮らしを送ることだと言っていました。彼女はこの夢を追いかけ、青春時代を楽しみたいと考えていたのです。彼女の故郷の村では、多くの少女が17歳や18歳という若さで結婚しますが、イマスは、結婚はもう少し遅い方が良いという考えを持っていました。彼女は自分も青春を謳歌しつつ、妹を高校へ行かせようと決意しました。その妹は現在中学生で、イマスと同様に学校で休憩時間にお菓子を売ってお金を稼いでいます。イマスは毎月、給料から母親に仕送りをし、月々の生活費を助けています。食堂での仕事に加え、休日には食堂近くのアパートの3軒ほどの顧客から依頼を受け、清掃の仕事も行っています。

イマスの出身地の村は、辺りな場所ではありませんが、因習的な考え方が色濃く残る地域です。その村では、女性はいまだに「二流の」人間と見なされています。村の少女たちの多くが、小学校卒業後に大都市へと移り住み、メイドやベビーシッターとして働きます。なかには、海外に出て移民労働者となり、メイドとして働く少女たちもいます。この村では、高等教育を受ける女子の数は多くはなく、いずれは主婦になるだけの女子に高等教育は不要だという考え方が流布しています。

イマスは、4カ月ごとに帰省するよう心掛けていますが、実家に帰る度に両親から結婚について尋ねられます。そればかりか、彼女はまだ20歳にも満たないというのに、独身であることを近所の人たち

から口やかましく言われます。17歳の時、イマスは家族から見合い結婚を勧められましたが、拒否しました。結婚を決める前に、人生の旅路を自らの意思で歩み、青春を謳歌しようと決意していたからです。イマスは何も特別な女性ではありません。しかしその固い意志は、中学生の妹にも既に影響を与えています。妹は高校に進学しようと考えており、結婚して身を固める前に人生を楽しみたいと思っています。

イマスのケースは、あまり一般的とは言えないのかもしれませんが、実際にこのようなケースが起きているのも事実です。多くの未成年の少女たちが、お金を稼ぐために働き、高等教育を受けることを諦めてしまっています。イマスの場合は、ジャカルタという環境に身を置いていたことが幸いしています。そこでは周囲の人たちが、彼女の決意をサポートしてくれているからです。最低賃金で働きながらジャカルタで暮らすイマスですが、それでも彼女は、何とか人生をより楽しめるものにしてしています。イマスにはパワーがあります。今よりも良い方向に進みたいという気持ちを行動に移す、これぞ少女の底力です。

イマスはコミュニティーのリーダーなどではありません。しかし、彼女は既に妹に先例を示しており、妹はそれに倣い、歩みを進めようとしています。ですから、イマスは自らの人生、世界を自身の力で切り開こうと奮闘しているリーダーと言えるのではないのでしょうか。



ヒジャブをまとい、食堂で夜勤をこなすイマス